



The Nirakuen

創業 80周年記念誌

Chronicle

二楽園綜合園芸株式会社

Chronicle(クロニクル)＝記録。年代記。編年史
「二楽園の歴史物語」といった意味です。

社 訓

- 一、信用は、繁栄の母
- 一、技術革新は、繁栄の父
- 一、人材育成は、繁栄の基礎
- 一、人の和は、繁栄の近道
- 一、仕事を愛し、会社を愛することは、繁栄の原動力
- 一、人に社会に奉仕する精神は、繁栄の精神

二楽園賛歌

作詞 奥谷惟之
作曲 河田信秀

- 一、ファッション神戸花の町
かおりゆたかな岡本に
あなたに贈る緑と花を
真心伝えるアレンジメント
永くはぐくむ二楽の園
広く大きく花開く

- 二、造園装園ランドスケープ
ビルもオフィスも緑に映えて
部屋を装うインテリアグッズ
素敵なエクステリア マイガーデン
永くはぐくむ二楽の園
広く大きく花開く

- 三、心をあわせて誠をもちて
社是を守りて社会に尽くす
永くはぐくむ二楽の園
広く大きく花開く
広く大きく花開く





創業 80周年記念モニュメント

流政之氏制作の記念碑を建立しました

「二楽園」創業の当時、武庫郡本山村岡本と呼ばれていたこの一帯は、梅は岡本、桜は吉野」と称され、江戸時代から梅の名所として知られていました。また、水上勉の小説「桜守」のモデルとなった桜博士 笹部新太郎氏の邸宅があった街としても知られ、邸宅跡は現在「桜守公園」として市民に親しまれています。そういった美しい街・岡本のアイデンティティーを広くアピールし、街の活性化の一助となるようこと、弊社では創業 80周年を記念したモニュメントを建立しました。笹部桜の園岡本、梅林の里岡本」をテーマに、世界的な彫刻家 流政之氏に創作をお願いし、快諾を得て制作されたものです。創業以来 80年、当地で生まれ、ご愛顧いただいていた「二楽園」の感謝の形として、地元のみなさまに親しんでいただければ幸いです。



流政之氏のプロフィール

1923年長崎県生まれ。各地を放浪し彫刻にかかわる。1975年ニューヨークのワールド・トレードセンターのシンボル「雲の砦」をつくり国際的評価を得る。日本建築学会賞、日本芸術大賞、中原梯二郎賞、吉田五十八賞など受賞歴多数。



●二楽園社名のいわれ

「阪神間モダニズム」の象徴「二楽荘」に由来

「二楽園」は 1923年（大正 12年）、故・奥谷奥之助の手で当地に創業されました。当時、岡本の六甲山麓には、明治時代に大規模な中央アジア探検隊を派遣したことで知られる西本願寺門主・大谷光瑞氏が建設した大邸宅「二楽荘」がありました。インドのタージマハルを模したといわれた洋館は「本邦無二の珍建築」と評され、邸内に日本初のケーブルカーやマスクメロンを栽培した温室、仏教中学校、気象観測所などが設置された、壮大なスケールの

建物でした。創業者・奥谷奥之助は、当地で洋ラン・バラ・カーネーション・花卉及びメロンやトマト、ブドウなど上流家庭向けの園芸品を栽培するにあたり、「阪神間モダニズム」を象徴する存在であった「二楽荘」の名にちなみ、社名を「二楽園」としました。残念ながら「二楽荘」はその後、昭和 7年に火災のために焼失し、六甲山麓にあった夢のような洋館の伝説は人々の記憶から忘れ去られ、当社の社名に往事のよすがを残すばかりとなっています。

創業 80周年を迎えて



取締役会長
奥谷惟之

花と緑を通じて、暮らしに “充実”をお届けします

ここ岡本の地に先代・奥谷奥之助が「三楽園」を創業し、今年でちょうど80年を迎えます。その間、第二次世界大戦や阪神大震災など、幾多の苦難を経験しながらも、今日まで企業が存続できましたことは、ひとえに地元のみなさまのご愛顧のたまものと、深く感謝いたします。ふりかえりますと私の人生は、花と緑とともに歩んできた人生でした。人に憩いや潤いを与えてくれる花や緑を一生の仕事とできたことは、大きな幸せでした。一輪の花が人の心をなぐさめ、一鉢の緑が人の心を豊かなものにしてくれる不思議な力は、昔も今も変わりはありません。これからも「三楽園」は花や緑を通じて、みなさまの暮らしに“充実感”をお届けするお手伝いをしていきたいと願っております。

奥谷惟之 略歴

大正 10年、大阪生まれ。昭和 16年、父の急逝により「三楽園」を継承。以来、花卉栽培 販売、造園などを積極的に展開し、「三楽園」の名を全国的なものにする。兵庫県造園園芸総合事業協同組合、兵庫県インドアグリーン協会、兵庫県園芸商協会、日本園芸商協会、日本生花通信配達協会など、業界団体の要職も多数歴任。永年の功績により、平成 2年黄綬褒章を受章。



黄綬褒章の賞状



取締役副会長
松本良三

「信用第一」をモットーに 営業を続けて半世紀

創業 80 周年にあたり、「**㊿楽園**」を今日まで支えてくださいましたお客様やお取引先のみなさまに、深く感謝を申し上げます。「信用第一」を胸に、ひとえにお客様本位で営業をしてきた半世紀でした。終戦直後、空襲のために瓦礫と化した大温室の跡を整地しつつ、配給制度の野菜や花卉等を栽培しながら、少しずつ復興を進めた時代を思い起こしますと、万感胸に迫るものがあります。その頃から現在に至るまで、奥谷会長の仕事をサポートし、社業の繁栄と業界の発展に努力を重ねて参りました。幸いにも、弊社が設立に尽力した業界団体も順調に成長し、有能な人材も多数育っています。若い世代のみなさんには、我々世代が引いてきたルールにこだわることなく、自由な新しい発想で、これからの花卉 園芸の世界をリードしていただきたいと思います。



代表取締役社長
奥谷信秀

本物を追求し、専門企業へ ～「初心忘るべからず」の心で～

おかげ様で、今年「**㊿楽園**」は創業 80 周年を迎えることができました。これもひとえに、皆様方の絶大なるご指導、ご支援の賜物と心より感謝申し上げます。現在の「**㊿楽園**」があるのは代々の先輩諸氏が築き上げてきた歴史があるからこそであり、この伝統をさらに積み重ねていきたいという思いを新たにしています。先輩方の業績によって「**㊿楽園**」の名は広く知られるようになりましたが、弊社は今後、より安定した企業体質にするために、事業においても人材においても、専門性やオンリーワンといった本物をより一層追求していきたいと思っています。そして、全社員が常に「初心忘るべからず」の心で、お客様に喜びをお届けする感動を大切にしていきたいと考えております。

「創業～戦中・終戦編」

「山の手族御用達」モダンな園芸店の誕生



初代 奥谷奥之助

「二楽園」は大正12年、まだ農村風景が広がる岡本の地で産声をあげました。創業者の奥谷奥之助は、米国式の大温室を建設し、メロン、スイカ、トマト、ブドウなど、当時珍しかった高級フルーツを栽培する、「山の手族御用達」の園芸づくりをコンセプトにしました。この当時は、自家用車で山の手の子が買物に訪れ、大阪の明治屋が店頭商品用に頻繁に仕入れにきていたといいます。まさに、大正から昭和初期の「阪神間モダニズム文化」を体現した、ハイカラな「花の栽培であったわけです。奥之助は洋ランの温室栽培も手がけ、天皇陛下ご来神の折には、二度にわたり洋ラン献上の栄を賜りました。また、神戸中央花市場の開設にも奔走し、兵庫県における花卉市場の成立に力を尽くしましたが、これからという昭和16年に惜しくも他界。以後、奥谷惟之が21歳で事業を引き継ぎ、現在の「二楽園」の基盤をつくっていきました。



創業者・奥谷奥之助は、紡績会社の工場長を勤めた技術者でもありましたが、健康を害してからは園芸に生きることを決意し、岡本に「二楽園」を設立しました。出生地の福井県には、奥之助・妻倭文子の業績を称えるモニュメントが建立されています。



初代・奥之助（前列右から2番目）は、現在の兵庫県生花市場の前身の創業にも尽力しました。写真は、市場設立に参加した有力事業者の方々です。



初代・奥之助は、洋ランなどの鉢ものの栽培も巧みで、昭和の観艦式の折りなど、二度にわたり昭和天皇へ洋ランを献上しました。天皇陛下に粗相があつてはならぬということで、献上前には家中が消毒されたというエピソードがあります。

昭和初期の二楽園周辺



戦前の理科の教科書には「温室」という項目があり、小学生がよく社会見学で「二楽園」の温室を訪れていたといいます。地下ボイラー室や給水ポンプなど、当時としては非常に珍しい近代設備を備えた温室でしたが、神戸大空襲で被弾し大破しました。（写真は、戦後に建設された二代目の温室です。）

初代・奥之助が建設した大温室には、散水用のタンクがついた、たいへんのつぼな給水塔も建てられていました。塔には写真のように、「二楽園」の看板が掲げられており、当時は国道二号線を走る自動車からでもよく見えるランドマークとなっていました。戦後は写真のように給水用鉄管が売り払われて、給水ポンプとしての役目は終えていたのですが、阪神間の人々に「二楽園」の名を知らしめた広告塔として、重要な役割を果たしました。



大正から昭和初期にかけて、まだ一般市場には出回ることの少なかった温室栽培のメロン、トマト、スイカ、ブドウなどの高級フルーツを栽培した「二楽園」は、ハインソな阪神間の山の手の方々の御用達に応じていました。写真は、大温室内で栽培されていたトマトです。奥行きからも、非常にスケールの大きな温室であったことがしのげられます。



地図は昭和10年6月30日 陸地測量部発行の1万分の地形図「蘆屋 御影」の一部を使用したものです。

「戦後～近代編」

進駐軍のPX時代から「バラの二楽園」へ



第二次世界大戦では岡本
一帯も激しい空襲に見舞
われ、「二楽園」の大温室
は大破し、奥谷夫妻も九
死に一生を得て福井県に
疎開。終戦後、ようやくの
思いで当地へと戻り、一面
の瓦礫と化した敷地を整

地することから「二楽園」の復興は始まりました。大温室の鉄材を、スクラップとして切り売りすることで食いつなぎながら、商機をうかがっていた二代目の奥谷惟之は、進駐軍に知遇を得て、神戸大丸にあった進駐軍PX（購買部）で切り花を販売するチャンスを得ます。米軍将校やアメリカ人花屋から、欧米仕込みのフラワーデザインや商品知識を吸収しながら、惟之はこれまでの日本の花屋にはなかったさまざまな商品仕入れや演出方法を展開していきます。また、京大植物園からわけてもらった仏種バラをもとに、敷地内にバラ花壇を造園し、「バラの二楽園」の名を世間にとどろかせます。



戦後、進駐軍とのビジネスが、「二楽園」の戦後復興に大きな転機を与えます。進駐軍に接収された神戸大丸の1階でPXの花売場を担当し、カーネーション、バラ、スイートピーなどを販売しました。物資の不足した時代に花卉商品を確保するため、惟之は生産地をたずね歩き、淡路の水仙や明石の菊などを仕入れ、伊丹の栽培家との契約には、バーターとして進駐軍の石炭や電話開通の紹介をして、大いに喜ばれたといいます。



昭和27年、京大植物園から200株の仏種バラ「ピース等」を分けてもらい、バラ花壇を造園。満開のバラ園にマスコミや見物客が殺到して人気を博しました。これを知った神戸市が、戦後の市民生活に潤いをあたえようとバラ協会を設立することを呼びかけ、大丸では年2回のバラ展が開催さ

れるなどして、一躍「バラの二楽園」の名が広まっていきました。写真は、昭和27年5月の第1回バラ展示会です。



昭和30年、奥谷惟之は進駐軍のアメリカ人から教わった欧米式の花の演出方法を応用して独自のフラワーデザインを考案、神戸市のコンテストで上位の特賞を独占しました。近頃の鉄工所で作らせた曲線の鉄芯に花をアレンジしたシンプルなものでしたが、竜宮城や松竹梅をかたどった「立花」が常識だった時代に、惟之のデザイン感覚はたいへんモダンで斬新な発想と映りました。



戦後の窮乏生活からようやく人々の表情に笑顔が
戻り始めた昭和 23年、庭園の一角に間口 3間、奥
行き 2間半の店舗をつくり、種苗や鉢ものの小売り
を本格的に再開しました。写真上は、その 5年後に
拡張した時の店舗風景で、左側の日本語看板の家
屋が最初の店舗部分です。



「楽園」といえば摂津本山駅前の顔と
して、地元のみなさまに親しまれてきまし
た。また、ここを通学路とする甲南大学
の学生たちにとっても、青春時代の 1ペ
ージに記憶されている風景でもあるよう
です。この当時はまだ、駅から六甲山麓
がすっきりと見通せるほどでした。

二代目の奥谷惟之は、社業のみならず
業界の発展にも尽力し、兵庫県造園園
芸総合事業協同組合をはじめとする業
界団体の育成に心をくだいてきました。
とりわけ、人材育成を目的としたデザ
イン学校の設立など、業界で働く子弟
の教育に熱心に取り組んできました。



「現代編」

小売り店舗と造園部門を両輪に「綜合力」を発揮



店頭販売も順調に伸び続け、昭和 35年には店舗を拡張、震災まで長らく親しまれた「二楽園」のお店が誕生しました。（写真は前店舗）

修景などを手がけ、大規模な造園プロジェクトにも自治体からのご指名をいただくようになりました。平成 10年には、「二楽園綜合園芸株式会社阪神事業部（グリーンステージ）」を芦屋市に設立し、造園事業の一層の強化拡大を図ってきました。阪神大震災後は、摂津本山駅前の本社を山手幹線拡幅による再開発ビルとして建て直し、岡本地区の商業コアとして親しまれています。

高度経済成長期を迎えた日本と歩調を合わせるように、花卉・園芸の市場も活況を呈していきます。「二楽園」も店舗数を増やし、小売りだけでなく造園土木や外構工事などの事業部門を拡充していきます。造園事業では、一般住宅はもちろん、神戸市や西宮市をはじめとする公園や公共施設の緑化、



長く親しまれた岡本本店 前店舗）

第 77回 創立記念写真



昭和 56年、水上勉の小説「桜守」のモデルとなった桜博士・笹部新太郎氏の邸宅跡に「岡本南公園（通称「桜守公園」）」が誕生し、地元の方々を中心とする「桜守会」がこの公園をボランティアで管理しています。弊社はそのお世話役として、長年公園メンテナンスを続けています。



昭和 33年六甲海星病院工事現場



神戸六甲アイランドマリナーパーク



神戸市花のフェスタの立体花壇



神戸市立フルーツフラワーパーク

自治体や企業、商業施設から一般住宅まで、幅広いお客様からのニーズにお応えするため、平成 10年には、「三楽園総合園芸株式会社 阪神事業部（グリーンステージ）」を設立し、造園や修景、外構工事などの造園事業を、専門集団による高い技術力で推進しています。小売り部門と造園部門を両輪とする「三楽園」の「総合力」は、幅広い事業分野で発揮されています。



新店舗オープンに合わせ、阪急岡本駅では駅全部のポスター掲示スペースを借り切った「駅ジャック告知」を展開し注目を集めました。オープニングセール当日は、震災復興を待ちわびていたお客様の行列が二重三重と続き、摂津本山駅前に明るさが戻りました。



平成 7年に阪神間を襲った大地震は、岡本の街も無惨な姿へと一変させました。幸いにも「三楽園」は倒壊をまぬがれましたが、これを契機に山手幹線拡幅による駅前再開発のプロジェクトを推進し、平成 12年 10月、地上 14階建ての「ガーデンライフ岡本」が完成。「三楽園」の店舗を中心にカフェや雑貨店、化粧品店、ファーストフード店、書店などの商業施設が集積した駅前ビルとして、新しい岡本の顔となっています。



The Nrakuen Vocabulary 二楽園ことばの事典

創業以来「二楽園」が大切にしてきた企業姿勢や会社の歴史を、キーワードでご紹介します。

光の百選

古くから「1,000万ドルの夜景」をうたわれた神戸市では、夜景の美しいスポットを100か所選定する「光の百選」を実施しています。「二楽園」の本店と本社がある「ガーデンライフ岡本」は、この「光の百選」に選定されています。ガラスを主体としたエレガントなファサードは、夜ともなればスタイリッシュなライトハウスとなって駅前広場を彩っています。写真は、クリスマスシーズンに行われている、岡本商店街主催のイルミネーションコンテスト中の「二楽園」店頭です。



総合

弊社は「二楽園総合園芸株式会社」を正式名称としています。総合ではなく、総合」として、いるところに、「二楽園」の企業精神が表現されています。すなわち、総花的な園芸企業になるのではなく、どこにも負けない専門知識を持ったプロフェッショナル企業になるのだ、という決意がここにこめられています。花卉小売り部門と造園部門を両輪とする「総合力」は、さまざまな公共工事や大規模プロジェクトにおける造園土木で発揮されています。



福袋

「二楽園」ファンのみならず、まにはおなじみの「花の福袋」は、歳末の風物詩として岡本の街で親しまれています。10種類の花や緑がセットされた福袋を、2,000円～2,500円というサービス価格で提供、400個限定の袋は、またたくまに売り切れとなります。年に1度、感謝の意味を込めた「二楽園」からのプレゼント企画です。



装園

「二楽園」は今から20年ほど前、装園」というコンセプトワードを掲げて、新しい市場分野を切り開いてきました。園芸でもなく造園でもない装飾する園芸、「いつか花で庭を飾る時代が来る」という確信を持って、現代でいうガーデニング的な発想をいち早く取り込み、内外に提唱してきました。



優良団地賞

平成12年10月に竣工した「ガーデンライフ岡本」は、地下1階地上14階建ての、住宅と商業施設を持った駅前ビルとして、岡本のランドマークとなっています。「二楽園」本店の店舗を修景にした開放感あふれるファサードは、スタイリッシュな岡本の街らしいムードを演出し、地元のみならずからも好評をいただいております。こうした地元への貢献を評価され、平成13年には、住宅金融公庫より「KANSAI 優良団地賞」に選ばれました。



英国王立園芸協会

平成12年に開催された「淡路花博」では、英国王立園芸協会（RHS）からのご指名により、最終イベントを飾るテーマガーデンとして、同協会監修による「新しい日本の庭」を造園しました。本場のイングリッシュガーデンをベースに、日本独自の植物をミキシングした斬新な庭園は、花博のフィナーレを飾るにふさわしい斬新なガーデンシーンとして、多くの来場者の目を奪いました。



事業紹介

販売事業

- 切花、鉢物、ガーデニング用品、インテリア商品、ギフト商品の販売事業



造園事業

- 官公庁を中心とした造園事業
- 一般造園工事・エクステリア事業
- お庭のメンテナンス事業
- ホテルやお店向けのグリーン装飾事業
- オフィスやマンション・建物等の景観事業



The Nirakuen Chronicle

NIRAKUEN
SINCE 1923

二楽園綜合園芸株式会社

〒658-0072 神戸市東灘区岡本1丁目2番1号
TEL / FAX 078-452-6177
<http://www.nirakuen.com/>